

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

- 縄文時代初頭の移動とルートについて…………… 重田 勉 (1)
- 近江地域のカマド形土器
—渡来系集団の動向把握にむけて— …………… 辻川 哲朗 (6)
- 出土文字資料に近江古代史を求めて
—付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」— …………… 濱 修 (18)
- 正倉院文書に見える三雲寺の所在地について…………… 小松 葉子 (26)
- 奈良時代の地域開発と神社本殿
—蒲生野・金貝遺跡の調査成果から— …………… 中村 智孝 (39)
- 近江における瓦器の基礎的研究…………… 堀 真人 (50)
- 安土城の空間特性 —安土城は神社だ— …………… 大沼 芳幸 (67)
- 高島郡における山城の築城画期 …………… 小林 裕季 (75)
- 将棋史研究ノート8 —歩兵の存在感— …………… 三宅 弘 (84)
- 研究ノート 近代化の痕跡
—彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物— …………… 小島 孝修 (89)
- 琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
—滋賀県の遺跡における古生態学データの集成— ……………
林 竜馬・佐々木 尚子・瀬口 真司 (97)

30

奈良時代の地域開発と神社本殿

—蒲生野・金貝遺跡の調査成果から—

中村智孝

1. はじめに

金貝遺跡は、県内の湖東地域にある東近江市に所在する。鈴鹿山地を源に流れだす愛知川の中流域で、この河川によって形成された扇状地の左岸に遺跡は立地している。

この遺跡は、ほ場整備や愛知川の河川改修工事に伴って、平成19年度から21年度にかけて行われた発掘調査により、奈良時代から平安時代にかけての集落遺跡であることが明らかになった。奈良時代の竪穴住居や奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物のほか、愛知川からの灌漑水路とみられる遺構などが確認されており、当該地域における扇状地の開発のあり方を示す成果が得られている（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2010・2011）。

このような成果の中で、建物形態から神社本殿の可能性が考えられる掘立柱建物が平成20年度の発掘調査によって確認された。庇内部に柱穴を持つなどの柱配置に特徴を持った建物で、三間社流造の上賀茂神社本殿に似た建物形態をしていた。現地において建築学の観点からも検討が行われた結果、この建物は三間社流造の神社本殿の可能性が高いと判断され、奈良時代後半に建てられた流造の神社本殿として注目を集めた¹⁾。

本稿では、開発の様相や神社本殿について、当該遺跡でこれまでに明らかになっている事柄を改めて評価し、奈良時代の地域開発や神社本殿について検討を行う。

2. 愛知川左岸中流域の開発について

(1) 金貝遺跡の調査成果

この遺跡では、古代における開発の様相が明らかになっている（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2010・2011、東近江市教育委員会2011）。特に、調査を担当した八日市新川広域河川改修工事に伴う発掘調査は、奈良時代から平安時代にかけての集落と灌漑水路が確認され、この点を示す重要な成果が得られている（図2）。

奈良時代前半（8世紀前半）には、竪穴住居4棟が検出されている。この時期に先行する集落は確認されておらず、生活の場としての土地利用がこの時期から始まる。奈良時代後半（8世紀後半）になると、11棟程度で構成する掘立柱建物の建物群が形成される（図3）。この建物群は、建物の配置や重複関係などから二時期の建て替えが認められ、一面庇を持つSB13（5間×3間）・SB14（5間×2間）を主屋とし、付属屋や倉庫によって構成する5棟程度の建物群が各時期で認められる。SB13は、甕の据え付けたとみられる土壙が内部に4基ある。付属屋には一面庇を持つ（SB18）があ

り、倉庫はSB15・SB16・SH5のように2間×2間のものを主とする。

平安時代になると、二時期の建物群が場所を変えて形成される。平安時代前半（9世紀後半から10世紀前半）は、主屋となる一面庇の建物SB5（5間×2間）とL字状に配置される付属屋（SB4）などの建物群が確認できた（図4）。平安時代後半（12世紀前半）は、二面庇の建物SB8（6間×2間）を主屋とする建物群が確認できた。これらから、当該地での営みが平安時代になっても継続していたことがうかがえた。これらの建物群が分布する範囲に、奈良時代から平安時代前半に機能した水路2条（水路S25・水路S214）と、平安時代後半に機能した水路1条（S328）を確認した。最も遺構の残りがよい水路S25は、幅2.9～4m、深さ0.68～0.8m以上の規模があり、埋土の下層には流水に伴う粗い砂礫が堆積する。奈良時代後半にあたる建物群の存在から、遅くともこの時期には機能していたとみられる。

これらの水路と概ね平行して流れる筏川は、近代的な灌漑施設が整えられるまで当該地周辺を灌漑していた用水路である。検出した水路は、この用水路と同様に愛知川から引水していた灌漑水路と考えられた。

(2) 集落の動向からみた開発の様相

金貝遺跡で確認できた集落について、愛知川左岸中流域における集落の動向をもとに検討を行った（図5）。

この地域では、古墳時代後期以降本格的な開発が行われたことが明らかになっている。6世紀から7世紀前半の集落は、愛知川の湧水地にある日吉遺跡や、建部下野遺跡・建部城遺跡・川合寺遺跡といった愛知川沿いの自然堤防上に分布する遺跡で竪穴住居が確認されている。下流側の建部下野遺跡では6世紀前半から集落が営まれるのに対して、上流側の川合寺遺跡では6世紀末から集落が営まれることから、上流側に集落の範囲が広がった様子がうかがえる。

7世紀後半になると、これまで集落が分布していた範囲に加え、さらに愛知川の上流にある土位遺跡で新たに集落が形成される。この遺跡では、7世紀中頃から8世紀前半にかけての竪穴住居が確認されており、愛知川沿いに集落域の拡大が認められる。

8世紀になって新たに集落が形成されるのが、金貝遺跡の周辺である。金貝遺跡以外にも、小山遺跡、野村遺跡、野村北遺跡で竪穴住居が確認されており、集落の分布が認められる。

以上から、愛知川左岸中流域においては、6世紀から7世紀前半までは愛知川沿いの自然堤防上や湧水地の近く

に集落が営まれた。7世紀後半になると愛知川沿いの上流に集落域が拡大し、8世紀になって金貝遺跡などが分布する場所へとさらに拡大した様子がうかがえる。

金貝遺跡などが分布する場所は、愛知川左岸の扇状地でも段丘上にあたり、灌漑条件が悪いことから集落の形成が遅れることになったとみられる。したがって、金貝遺跡などの集落は、奈良時代になって灌漑水路の開削を行い新たに開発された場所に形成された集落といえる。

(3) 水路および溝からみた開発の様相

段丘上の開発に際して開削されたと考えられるのは、奈良時代から平安時代前半に機能していた水路S25・S214である。延伸する方向や愛知川までの距離を考慮すると、取水口から検出された場所までの水路は、1km以上の距離があった可能性がある。灌漑範囲については、周辺の遺跡で確認された同時期の水路や溝の分布範囲から、少なくとも筏川に沿った東西約1.5kmの範囲におよんでいたと考えられる(図6)。

筏川を参考にすると、灌漑範囲はさらに広い範囲におよんでいた可能性がある。近江八幡市安土町に所在する内野遺跡は、筏川が灌漑する下流に位置する。平成6～8年度にかけて行われた発掘調査では、8世紀後半から9世紀前半にかけての倉庫群を主とした掘立柱建物群などが確認されている(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997a・1998)。これらの調査成果の中に、8世紀頃の溝が2条確認されており、周辺が筏川によって灌漑されている地域であることから、同様の灌漑水路が存在した可能性が想定されている(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997a)。この想定に立てば、金貝遺跡で確認した水路の灌漑範囲は、約4km先にまでおよんでいた可能性がある。さらには、内野遺跡に倉庫群が設けられていたことから、水路を交通路としていた可能性も考えることができる。灌漑範囲については不確定な部分もあるが、金貝遺跡の水路は段丘上の開発地に伴って開削された長距離水路であったといえる。

この水路によって開発された場所の性格を検討するため、同じ湖東平野にある犬上川扇状地との比較をおこなった。犬上川は愛知川の北側を流れる河川で、発掘調査や歴史地理学の調査によって扇状地における開発の様相が明らかになっている(図7)。

扇状地左岸に所在する下之郷遺跡では、7世紀前半になって竪穴住居の集落が形成され、7世紀末から8世紀前半になると微高地上に掘立柱建物とともに多くの直線溝が確認されている。これらの溝からは、周辺を流れる河道から微高地上へと引水し灌漑していた農地開発の様子がうかがえ、微高地上やその周辺を対象とした耕作が行われていたと考えられている(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1990)。

これに対して右岸には、東大寺領水沼村墾田地の所在地として比定されている場所が存在する。この墾田地は、天平勝宝3年(751)に出された近江国司解に同じ流域にある霸流村とともに墾田地図が載せられており、右岸の扇頂部近くの扇側部にその範囲が比定されている(佐藤1996)。この場所には、二ノ井と大門池として知られる灌漑施設が存在し、墾田地図にも溝と水沼池として同様の施設が描かれている(図8)。これらは開発を可能とする重要な施設であり、特に基幹水路となる溝は墾田地の南側を縦断する方向に1km以上の距離があった。

先の近江国司解は、100町の水田を墾開したことを報告したものである。この場所に所在する敏満寺西遺跡では、8世紀以前に遡る遺構は確認されておらず、奈良時代後半から平安時代前半とみられる溝が古代の開発を示す最も古い遺構である。(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2002b)。したがって、大規模な灌漑施設を伴う開発により、奈良時代中頃に開発されたと見ることができる。

以上の比較から、湖東平野にあるふたつの扇状地では河道周辺にある微高地を対象として開発した段階から、開発が困難であった場所に大規模な灌漑施設を設け広範囲を開発した段階へとといった変化を奈良時代に認めることができた。

3. 建物群と出土遺物の検討

以上のように、扇状地における開発の状況が発掘調査の成果などからわかった。この点について、新たな視点から検討していきたい。

(1) 扇状地に分布する建物群について

愛知川左岸中流域と犬上川扇状地で確認されている掘立柱建物の建物群をもとに、地域の様相を見ていきたい。

管見の及ぶ限りでは、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物が495棟両地域で確認されている。愛知川左岸中流域では、筏川の流末に位置する内野遺跡を含め、14遺跡で189棟の建物が確認されており、犬上川扇状地では12遺跡で306棟の建物が確認されている。

この中から、奈良時代から平安時代前半とみられる桁行5間以上の建物を含む建物群を取り上げ、主屋となる建物や建物群の様相から建物群Aと建物群Bに分類した(図9)。平城京や平安京では、柱間が広くなることや庇が付く割合が高くなることなどから桁行5間以上で建物の格式が変わることが指摘されている(島田1989、南1995)。このことから、地域内でも主要な建物と考えられるため、先のように分類の対象を取り上げた。

建物群Aとして取り上げたのは、愛知川左岸にある日吉遺跡・内野遺跡、犬上川左岸にある長畑遺跡で確認された建物群である。

日吉遺跡では、SB01(6間×2間・四面庇)を中心に、

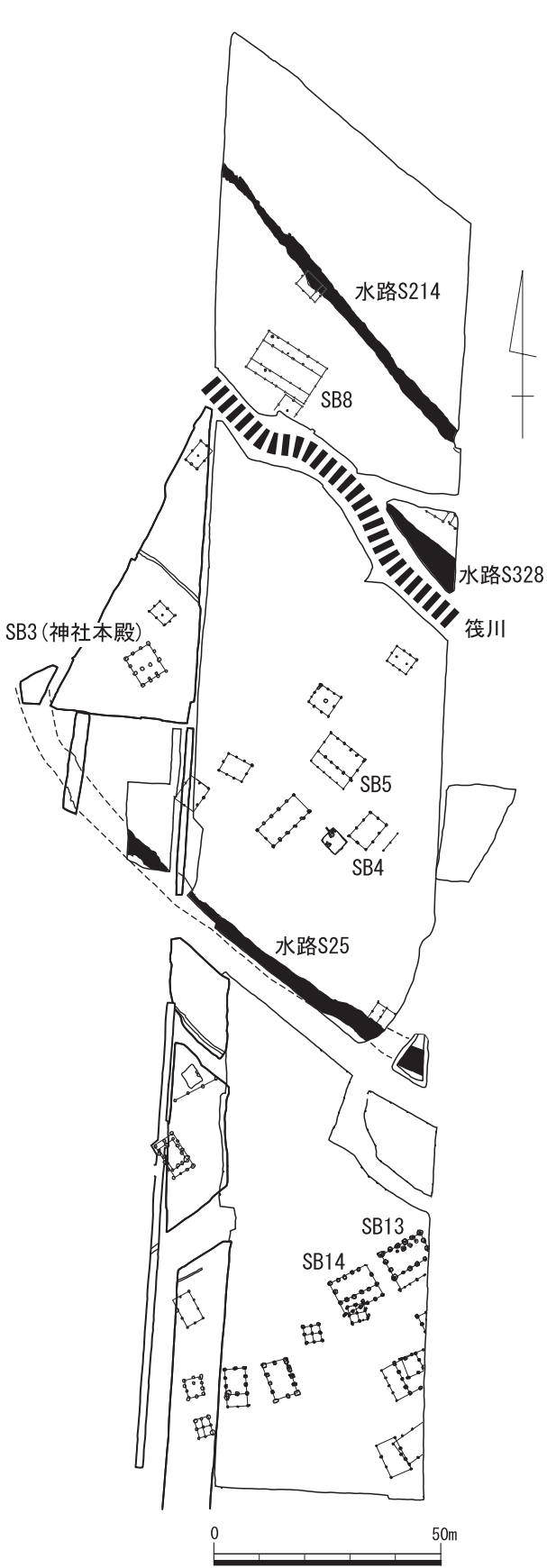


図2 金貝遺跡 建物遺構および水路分布図



図1 金貝遺跡および扇状地位置図

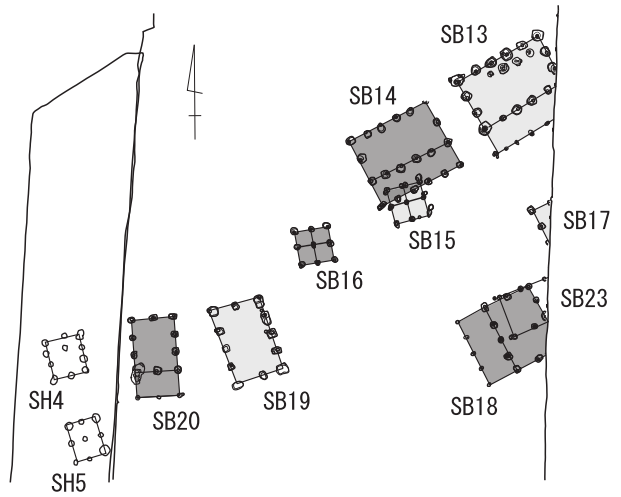


図3 奈良時代後半の建物群
* トーンの違いは、時期差を示す

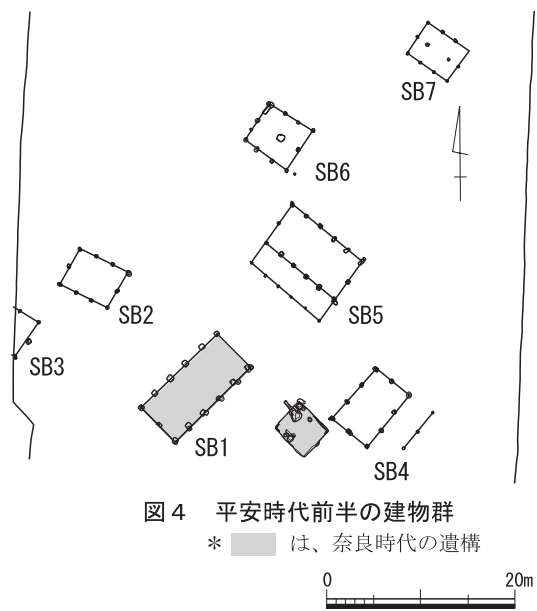


図4 平安時代前半の建物群
* ■ は、奈良時代の遺構

* 図2、図3、図4 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2011による。一部改変

SB02(7間×2間)やSB04(8間×2間)などが企画的に配置された建物群が確認されている。SB01は3回の建て替えがあり、最終的には一面庇へと構造を変えている。身舎の建物面積は104.4㎡の規模があり、柱間は2.95mを測る。飛鳥時代後半から奈良時代にかけてのものとされ、建物配置から豪族の居宅と考えられている(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1979a)。

内野遺跡では、SB237(5間×2間以上、K地区)を含む建物群がある。SB237は、大規模な倉庫群とともに確認されている。倉庫群は、桁行3間のものが主体で、建物方位および重複関係から4時期の変遷が考えられている。これらの年代は、8世紀後半～9世紀とされる。この遺跡の性格は、建物群の構成や時期、墨書土器、供膳具を中心とした土器類などから、「荘所」、「豪族居館」、「公的施設」などが想定されている(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997a)。また、後述する長畑遺跡を含む同様の律令遺跡が、官道近くのそれまで利用されていなかった場所に立地することや一定の計画により大型建物や倉庫群が配置されていることなどから、郡衙の出先施設とする意見がある(大橋1998)。

長畑遺跡では、7世紀末から10世紀にかけての掘立柱建物が40棟確認されており、桁行5間以上の建物は14棟を数える。このうち第3期a(8世紀中頃)には、庇付きの大型建物を含む企画的に配置された建物群が確認されている。建物群は、SB101(6間×2間・二面庇)、SB102(5間×2間・一面庇)、SB106(6間×3間・一面庇)の主屋が確認され、それぞれに付属屋が配置されており、倉庫群も確認されている。SB101は、身舎の建物面積が105㎡、柱間は2.9mの規模がある。倉庫群は小型のもので構成され、桁行3間の規模がある5棟がL字状に配置される。第3期aの建物群は、建物配置や倉庫形態、出土遺物に官衙と性格付ける遺物がないことから、在地豪族の居宅とされる(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2002a)。また、先に記したように群衙の出先施設とする意見がある(大橋1998)。

建物群Bは、金貝遺跡と近い様相を示す建物群を取り上げた。これにあたるものは、建物群Aのように広い面積で確認されたものが少ないが、調査成果をもとに判断した。金貝遺跡以外では、愛知川左岸の川合寺遺跡・小山遺跡、犬上川左岸の尼子南遺跡・下之郷遺跡で確認された建物群を分類しておく。

川合寺遺跡では、SB-5・SB-6(5間×3間、第12トレンチ)とされる建て替えのある建物と近接する建物1棟が確認されている。後出する建物には出幅の短い庇が付く。年代は、9世紀中頃から11世紀に亘る時期である(八日市市教育委員会1993)。小山遺跡では、SB-4(5間×2間・一面庇、第1・4トレンチ)があり、3間×2間の建物が近くで確認されている。SB-4は、9世紀中頃から9世紀後

半の井戸が埋没したあとに建てられている(八日市市教育委員会1995)。

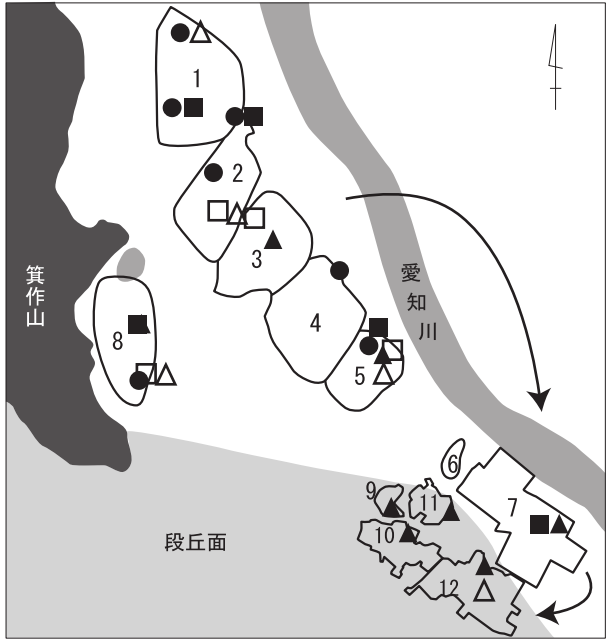
尼子南遺跡では、SH8401(5間×3間)やSH8404(5間×3間か)があるほか、総柱建物が6棟確認されており、主屋と倉庫のセットが認められる。また、建物群には堅穴住居も含まれる。これらの年代は、周辺の調査事例や建物方位から8世紀前葉とされる(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989)。下之郷遺跡では、SB-05(5間×3間・三面庇)の建物があり、周辺にはSB-06(5間×2間)とSB-04(2間×2間)の総柱建物が確認されている。SB-06は、中央の柱間が広いことから2間×2間の2棟であると見ることもできる。建物方位は異なるが、これらの建物群は主屋と倉庫の可能性がある。建物付近で出土する土器の多くは、8世紀のものである。(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1986)。

以上のように、愛知川左岸と犬上川左岸の建物群は分類することができた。建物群Aは、豪族の居宅や群衙の出先施設とされるものである。内野遺跡以外では桁行6間の建物が主屋に見られ、日吉遺跡SB01と長畑遺跡SB101は格式の高い建物である。これらを含む建物群は、企画的に配置された大型の建物が複数見られ、長畑遺跡や内野遺跡では倉庫群も確認される。中世には東山道の一部となる道が箕作山の周囲を通過していた(高橋2004)ことから、日吉遺跡の立地する場所は地域内では主要な道に面していたと考えられる。建物群Aとしたものは、官道などの主要な交通路の近くに立地するといえる。

一方で、建物群Bは、桁行5間の主屋と付属する数棟の建物で構成される。主屋の建物は、建物面積(身舎)が38.6～64.8㎡を測り、桁行の柱間は1.3～2.2mで、1.8m程度のものである。庇は10棟のうち6棟で見られる。総柱建物の倉庫が伴う場合は主に桁行2間のものであるといった特徴を指摘できる。また、建物方位は、金貝遺跡のように主要な部分では揃うものもあるが、すべての建物が揃うわけではない。金貝遺跡や小山遺跡のように灌漑水路に近い場所に立地することや、その他のものが奈良時代以前から開発された場所に立地することから、これらの建物群は田地の耕作に深く関わっていたと見ることができる。

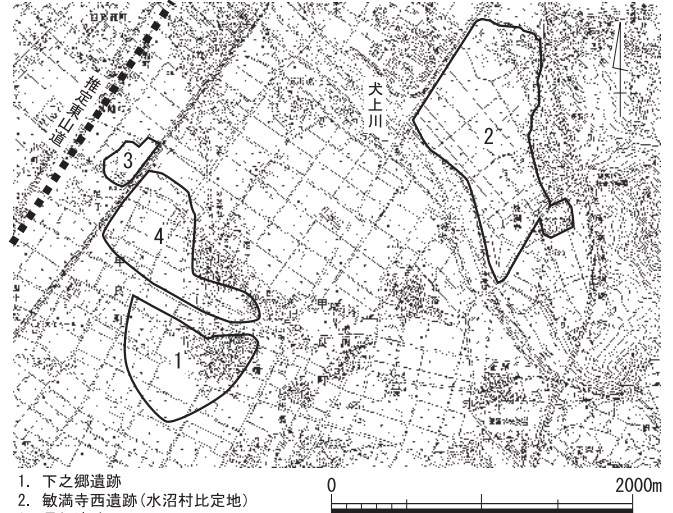
特に、金貝遺跡で確認した奈良時代後半の建物群は、段丘上では灌漑水路の最上流部に立地することから、開発地では重要な場所に建っている。建物群のSB18からは鍛造剥片が出土し、鍛冶が行われていたことが確認できた。耕作に必要な鉄製の農具などを製作・修理していたことを示すものと考えられ、この建物の性格をうかがうことができる。

建物群Bは、建物構成や建物配置などから有力者の居宅が想定される。金貝遺跡の建物群については、灌漑水路の管理も行っていたとみられる。富山県砺波市にある久泉遺跡では、大溝と近接した場所に建つ8世紀後半から9世紀



- 6世紀～7世紀前半
 - 7世紀後半
 - ▲ 8世紀
 - ※黒塗りは、堅穴住居
白抜きは、掘立柱建物
- | | | |
|-----------|----------|-----------|
| 1. 建部下野遺跡 | 5. 川合寺遺跡 | 9. 小山遺跡 |
| 2. 建部上中遺跡 | 6. 広間寺遺跡 | 10. 野村遺跡 |
| 3. 建部北町遺跡 | 7. 土位遺跡 | 11. 野村北遺跡 |
| 4. 建部塚遺跡 | 8. 日吉遺跡 | 12. 金貝遺跡 |
- *段丘面の範囲は、池田・植村1983 図4を参考にした。

図5 愛知川左岸中流域 集落変遷図



- 1. 下之郷遺跡
- 2. 敏満寺西遺跡(水沼村比定地)
- 3. 長畑遺跡
- 4. 尼子南遺跡

図7 犬上川扇状地 遺跡分布図

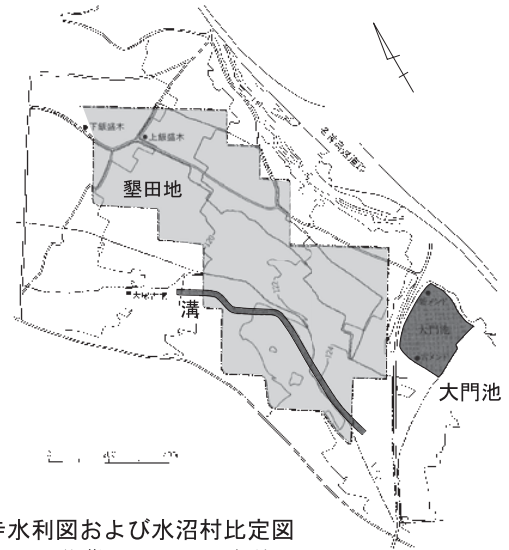


図8 敏満寺水利図および水沼村比定図
*佐藤1996による。加筆

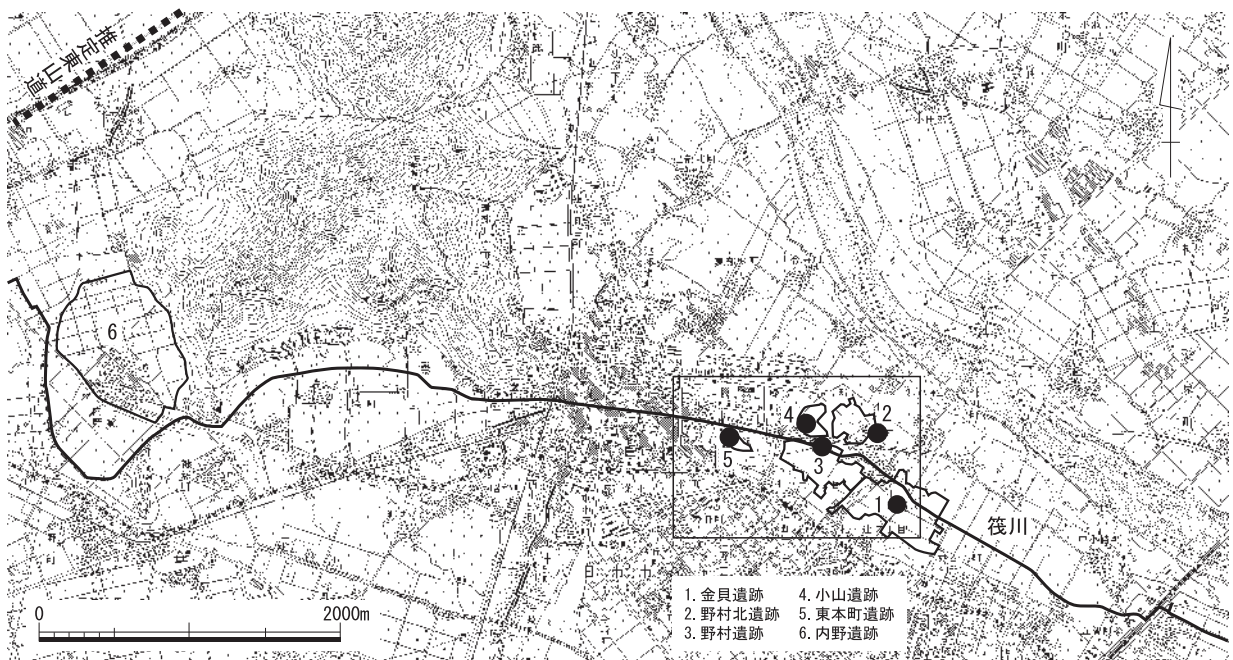


図6 金貝遺跡周辺の溝検出地点および筏川・内野遺跡位置図

前半の建物群が確認されている。大溝は、上端の幅が約7mあり、発掘調査やレーザー探査の結果、約2km以上の溝であることが確認されている。建物群は掘立柱建物4棟で、竪穴建物も含まれる可能性がある。大溝はそのルートから東大寺領石栗村の墾田地などを潤す用水溝で、建物群は荘所よりも規模が小さいことや溝の近くに立地することから、神護景雲元年越中国射水郡鹿田村墾田地図にある「溝所」（溝の管理施設）の可能性が高いとされる（金田2007）。金貝遺跡の建物群には、このような機能も想定できる。

これらは、建物群Aの在地豪族や郡衙の先施設と関係をもちながら地域の中で存在していたのだろう。

（2）出土遺物からみた開発地の様相

金貝遺跡を含む段丘上の遺跡などから出土した遺物のうち、開発地の様相を示すと考えられる遺物を採り上げたい。

開発に関わった人を示す遺物として、明治期に行われた開墾の際に出土した採取遺物に注目したい。採取遺物には、土師器甕2点と須恵器壺・壺蓋各1点、和同開珎5点がある。このうち、8世紀後半の土師器甕と和同開珎は、金貝遺跡や隣接する野村遺跡の近くで同時に出土したとされるものである。土師器甕は小型のもので、外面の調整は全体にハケメを施す。内面は上半に横方向のハケメを施し、下半にはタキに伴う同心円当具痕が認められる（図10 1・2）。1には、底部内面に銭貨によると考えられる円形の緑青痕が残る。（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009a）。

8世紀後半に県内で出土する小型の土師器甕は、いわゆる近江型土師器甕と呼ばれるものが主体として存在する（図10 3）。この土師器甕は、広口の短胴で丸底の形態をし、口縁端部を尖り気味もしくは丸くおさめる。外面の調整は上半をハケメ、底部付近を中心に下半にケズリを施し、内面の調整はハケメを施す（畑中1996）。

一方、土師器甕（1・2）は、大和（平城）地域に主体的に出土する一群と近似する特徴を持ったもので、県内では瀬田川河口部を中心とする湖南地域に分布する。この地域は、近江国庁や勢多駅家、国分寺、国分尼寺など律令国制の中心的役割を担う関連施設が集中するほか、保良宮などの施設や田上山作所などが所在することから、大和地域との直接的な関わりを背景として分布した可能性が想定されている（畑中1996）。

土師器甕（1・2）は、和同開珎とともに出土していることから、埋納するための容器として使用された可能性が高い。県内から出土した古代銭貨の検討では、このような事例は建物の近くから出土する場合は建物やその宅地の地鎮もしくは胞衣埋納で、単独で出土した場合は一定範囲の土地開発に伴う地鎮の可能性があると考えられている（辻川2005）。今回の事例は詳細が不明であるが、出土地点と想定される場所の近くで行われた試掘調査では遺構や遺物が

確認されなかったため、集落から離れた場所であったとされる（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009a）。しがたって、土地開発に伴う地鎮であった可能性が高い。出土した土師器甕の特徴や銭貨を用いていることから、湖南地域と関わりのある階層の高い人物が開発に際して地鎮を行った事を示すものではないだろうか。

官人層を示す遺物は、円面硯2点（図10 4・5）が野村北遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009b）から出土し、帯金具の銅製鉸具1点（図10 6）が野村遺跡から出土している（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009a）。愛知川左岸中流域では、奈良時代以前に集落が形成される土位遺跡から7世紀後半の把手付中空円面硯が出土しており（東近江市教育委員会2005）、奈良時代以前から官人層が地域開発に関わっていたことがわかる。野村遺跡や野村北遺跡から見つかった遺物からは、官人層の居宅もしくは施設が存在していた可能性が考えられ、開発地内での土地利用がうかがわれる。

4. 金貝遺跡の神社本殿について

金貝遺跡の調査成果で、注目すべき遺構が確認されている。それは、流造の神社本殿と考えられる掘立柱建物である（図12）。この掘立柱建物SB3について、調査報告書および黒田龍二氏の考察をもとに概要を記していきたい。

神社本殿とされる建物は、桁行3間、梁行2間の身舎に1間の庇が南西側に付く建物で、桁行総間20尺（6.07m）、梁行総間23尺（6.96m）の規模がある。それぞれの柱間は、桁行、梁行ともに6尺から7尺の規模があるが、庇の出のみ10尺と広い。柱穴は、平面形が隅丸方形のもので、一辺が50cmから95cmを測り、深さは19cmから60cm残る。身舎の柱に浅いものが3基存在するが、それ以外は概ね同様の規模を有するものである。柱の規模は、残存する柱痕跡のうち抜き取り痕の可能性がないものから、径20～30cm程度の柱が使われていたとみられる。

このような柱配置に加えて、庇部分内部の中央に、2基の柱穴（ろ二・は二）が見つかっている。柱穴は一辺41～52cmを測り、深さは23cmと30cm残存する。柱痕跡は、径15cmと19cmを測り、その他の柱に比べやや小さく、柱は細い。建物の年代は、出土遺物からは判断できなかったものの、灌漑水路を挟んで南東側160mの位置で検出した奈良時代後半の建物群と同じ建物方位であることから、同時期の可能性が高いと考えられる。（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2010）

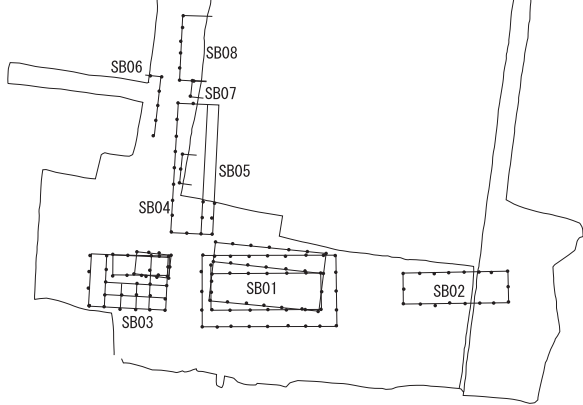
この建物を、三間社流造の神社本殿と評価された根拠は、復元形態の特徴である。その特徴を列挙すると、

①建物は三間一面庇の平面形態で、庇内部にある柱穴（ろ二・は二）の存在や深さのある柱穴が多いことから高床式の建物と判断される。

②庇内部の柱穴は階の親柱とみられ、神社や寺院でみら

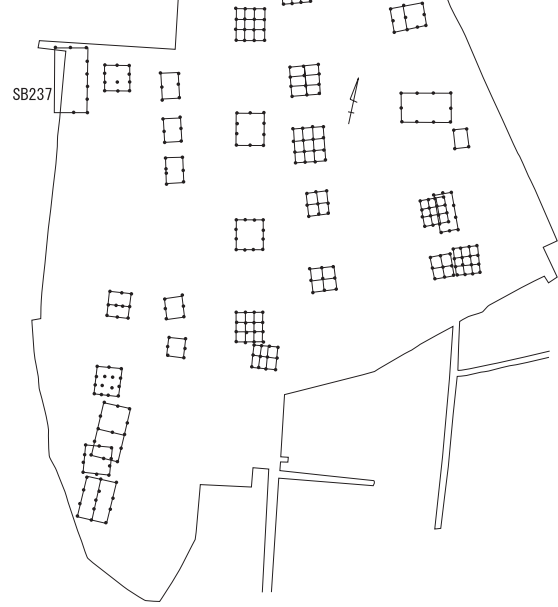
建物群A

日吉遺跡

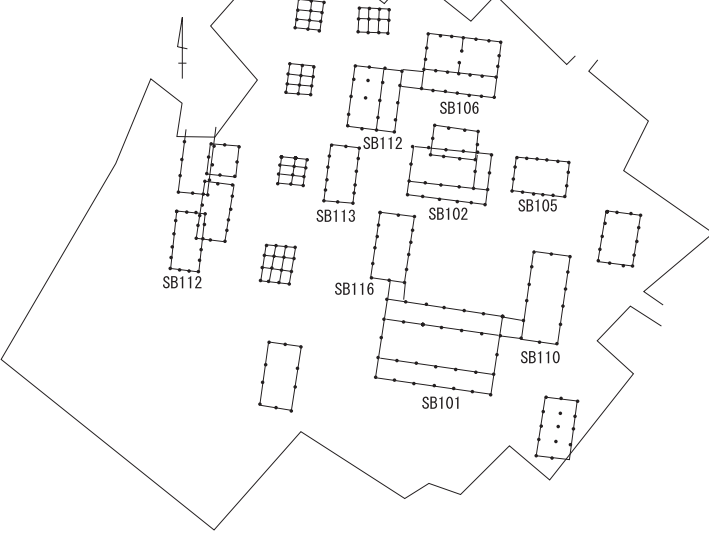


※SB01は、I期、III期を示す

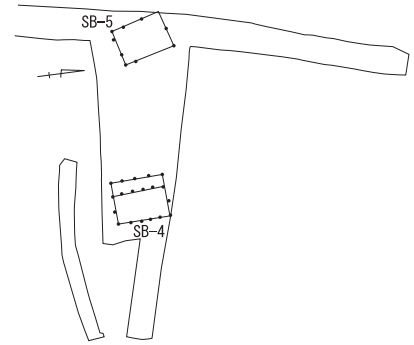
内野遺跡(K地区)



長畑遺跡(第3期a)

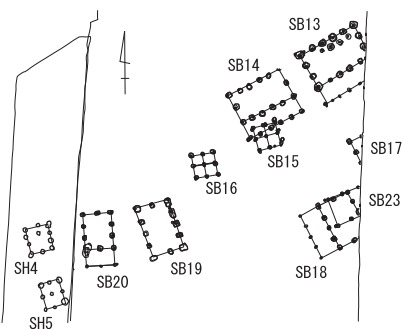


小山遺跡

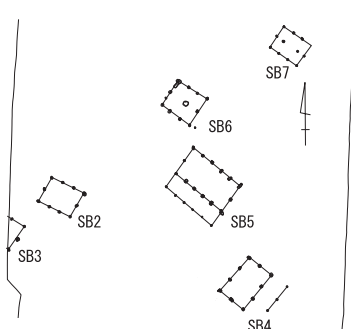


建物群B

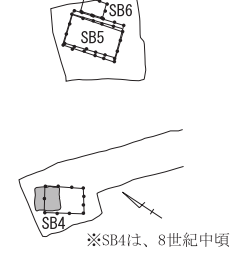
金貝遺跡(奈良時代後半)



金貝遺跡(平安時代前半)

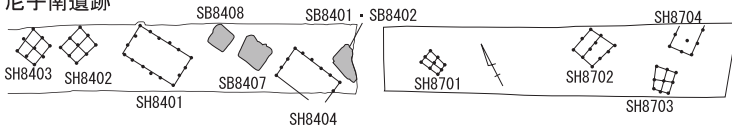


川合寺遺跡

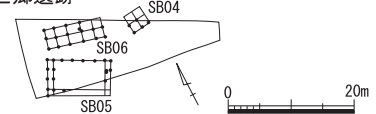


※SB4は、8世紀中頃

尼子南遺跡



下之郷遺跡



*各遺跡の図面は、各報告書の図面をもとに作成した。

図9 各遺跡の掘立柱建物群

れる階段が存在することから、格式の高い建築物であることを示すものと評価される。

③庇柱の柱が深く据え付けられ、柱痕跡から身舎と同じ太さの柱が考えられる。流造の庇は桁を介して身舎から流れてくる屋根荷重を受けるため、庇の柱は軽微なものではなく身舎の主要柱と同様の強さが必要であり、遺構の状況は上部構造の特徴に合う。

以上から、SB3が三間社流造の神社本殿で、柱間寸法などから上賀茂神社（賀茂別雷神社）本殿とほぼ同規模、同形式の三間社流造と推定された（図13）。奈良時代後半に、この形式の神社本殿が存在した可能性を示すものといえる。

また、上賀茂神社本殿は土台建てであるのに対して、SB3は掘立柱である。流造では土台建てが古形式と考えられてきたが、奈良時代後半の流造の神社本殿が掘立柱であることは、これまでの定説を考え直す発見として注目された（黒田2010）。

なお、庇にあたる梁行の柱間の長さに注目し、周辺に分布する庇付き建物（図3 SB13・SB18、図4 SB5）との比較から、SB3を評価する意見がある（内田2014）。ただ、比較の対象として挙げられているものには、上部構造の異なるものが含まれており、この意見には問題がある。庇の上部構造については、身舎と庇の屋根が一体としてかかる「一体型の庇」と、身舎と庇の屋根が別構造になる「非一体型の庇」があり、身舎と庇の柱径が同じか身舎のほうがやや大きいものは「一体型の庇」、身舎の柱径が格段に大きいものは「非一体型の庇」と考えられている（箱崎2012）。庇にあたる梁行の柱間が広いことは特徴のひとつといえるが、「一体型の庇」となる特徴が遺構に認められたことが上部構造を復元するうえでは重要な点である（図14）。

SB3については、奈良時代に灌漑水路を開削して新たに開発された場所に立地する。灌漑水路に近接し、段丘上では灌漑水路の最上流部にあたることから、開発に伴って建てられた神社であり、開発や水田経営の安定を祈り、それに関わる人々の精神的な拠り所であったとみられる。

この点については、新たな評価においても同様に考えられている（内田2014・松尾2016）。特に、この遺跡を含む神社の可能性が指摘された8～9世紀にかけての事例の検討から、水田に水を引く水路と関係の深い場所に立地するのが主流で、新たな耕地の拡大にあたって神社施設が必要とされ新設されたとする意見（松尾2016）は、この評価を高めるものといえる。

5. 開発主体について

愛知川左岸中流域の段丘上では、奈良時代に大規模な開発が行われ、神社本殿が建てられていたと考えられる。

では、この開発を行った開発主体はどのように考えることができるのであろうか。天平十五年（743）の墾田永年私財法や天平勝宝元年（749）の寺院墾田地許可令などが示す

ように、奈良時代中頃には様々な開発主体による墾田地の開発が活発に行われている。開発主体について、これまでに挙げた調査成果などを取り上げて想定をしてみたい。

まず、愛知川左岸と犬上川の扇状地で明らかになった開発の状況を上げることができる。これらの場所では、奈良時代になってそれまでとは異なる規模の灌漑施設を導入し、新たな開発が行われていた。このうち、犬上川右岸は水沼村墾田地に比定されている。天平勝宝3年（751）以前に発せられた「勅旨」・「太政官符」により東大寺墾田地の開発が命じられ、国司が水沼村と覇流村の墾田地の開発にあたっている（藤井1986・佐藤1996）。この時に開発された水沼荘は段丘上の扇側部に立地し、覇流荘も埋め残しの低湿地部に立地することから、開発し残しの環境が劣悪な部分を対象として開発されたことが指摘でき、畿内に近い近江はすでに開発がよく進んだ地域であったため、東大寺の墾田はこのような場所に設けられたとされる（金田1985）。

扇状地の開発は、犬上川左岸に数多く分布する古墳群の存在から、6世紀後半になって本格的に着手されたことがわかる。古墳群の出土遺物からは、様々な生業に関わる人々が存在したことがうかがえ、渡来系の人々を想定できるものもある。特殊な生業に関わる人々や新たな技術を持った人々の関与によって開発が推し進められ、下之郷遺跡などで集落が形成される7世紀中頃には安定した生活が営まれたとされる（滋賀県立安土城考古博物館2006）。

また、愛知川右岸の扇状地には、7世紀末に創建された畑田廃寺がある。この遺跡では、基壇や企画的に配置された掘立柱建物群が確認されており、寺院であるほか官衙的性格も想定されている。井戸から出土した習書木簡には、「秦」の文字が記されていることから、周辺で有力な豪族として知られる依知秦氏などの渡来系氏族が建立に関わっている可能性がある（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1979b・1979c））。この遺跡からも、扇状地における開発が進んでいたことをうかがうことができる。

奈良時代中頃に行われた新たな開発は、このような開発によって着手されなかった、もしくはできなかった場所を対象としたもので、開発を可能とする大規模な灌漑施設を造ることができた国家権力や国司による開発であったとみられる。金貝遺跡周辺の開発も、このような事例のひとつと考えることができる。

金貝遺跡が立地する段丘面は、古代において蒲生野と呼ばれた範囲にあたりとみられる。この蒲生野の南側にある布施池についても、同様の開発を考える上で注目される。この溜池は、古代に築かれた近江でも最大規模を誇る溜池の可能性がある。『続日本紀』には天平宝字8年（764）8月14日条に「使いを遣して池を大和、河内、山背、近江、丹波、播磨、讃岐等の国に築かしむ」とあり、また、刑部卿御淡海真人三船の卒伝に「（天平）宝字中に従五位下を授けられ、（中略）8年造池使に充てられ、近江国に往きて陂

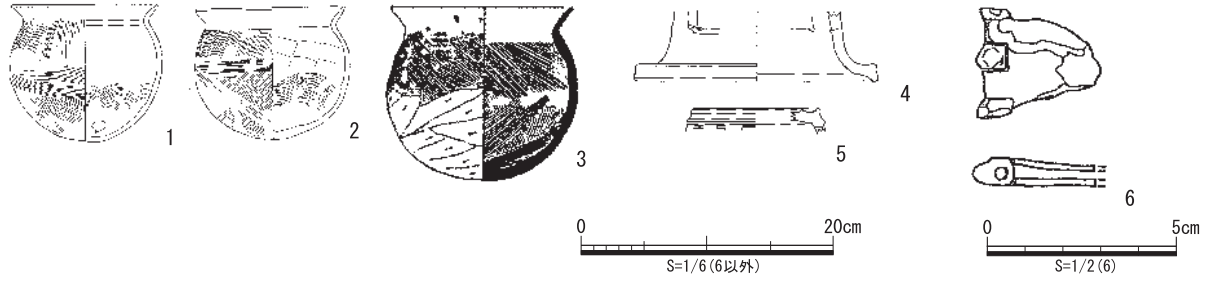


図10 採取遺物・野村遺跡・野村北遺跡・唐橋遺跡 遺物実測図

*滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009a・2009b、畑中1996による

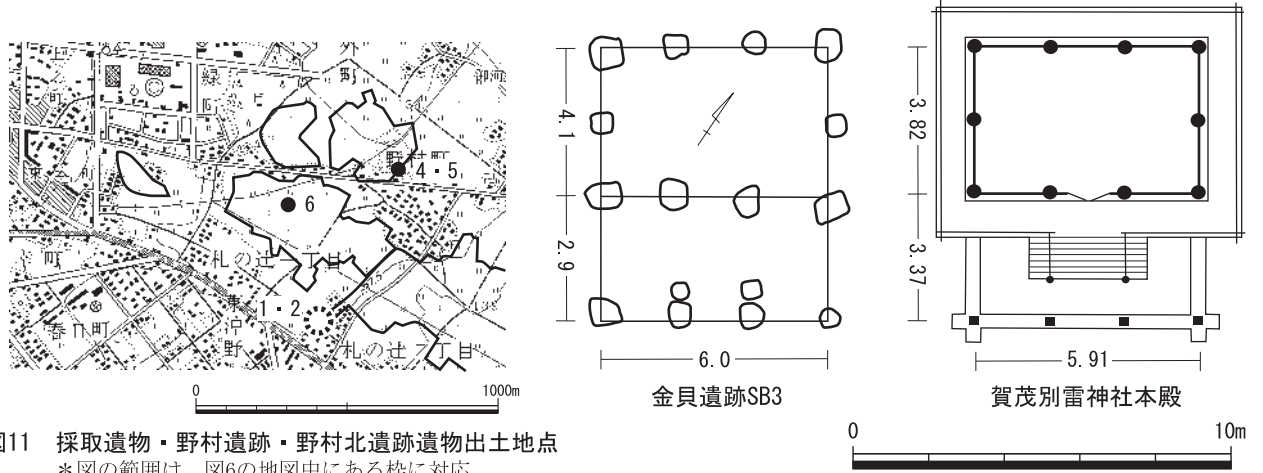


図11 採取遺物・野村遺跡・野村北遺跡遺物出土地点

*図の範囲は、図6の地図中にある枠に対応。
*滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009a・2009bによる

図13 金貝遺跡SB3と賀茂別雷神社本殿 平面図

*滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2010・毎日新聞社1998による 加筆・トレース

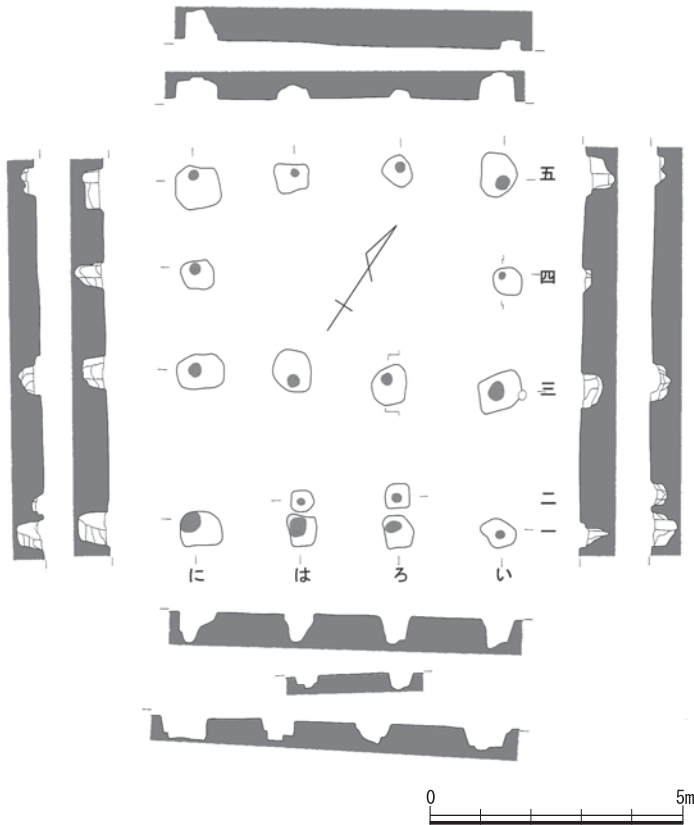


図12 金貝遺跡SB3 平面図・断面図

*黒田2010による

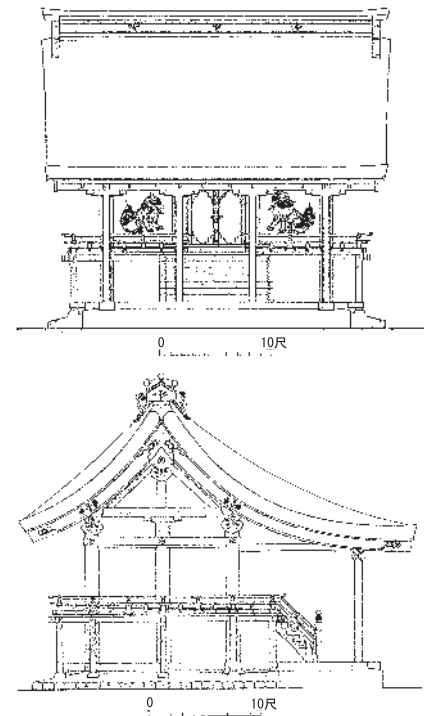


図14 賀茂別雷神社本殿 正面図・側面図

*太田1972による

池を修造す」とあることから、淡海三船によって造られた溜池が存在した。この池にあたるのが布施池とする意見があり、開発できる広大な土地の存在や大池を造り開発する場所としてもっと理にかなった地点であること、池の面積が狭山池にも比肩することなどから、蓋然性が感じられると評価されている（足利1983）。段丘面における国家権力による開発をうかがわせるものとして、興味深い。

次に、奈良時代後半の神社本殿とされたSB3を採り上げたい。この建物の最大の特徴は、賀茂社と同じ流造の神社本殿だということにある。周知のとおり、賀茂社は平安京遷都によって皇城鎮護の神社となり崇敬を受けていた神社である。社殿に関する記録は、『続日本紀』の延暦3年（784）11月乙丑条に「使を遣して賀茂上下の二社及び松尾乙訓の社を修理せしむ」とあるのが最初のものとして知られる。これは、同じ月に賀茂二社を従二位に叙し、松尾乙訓両社を従五位下に叙したのとならんで、長岡京遷都に伴う措置として行われたとされる（太田1972）。この時に新造された本殿を示す史料がないため、どのような本殿であったかは不明であるが、上賀茂神社で鎌倉時代末の嘉元元年（1303）に造替された流造の本殿が、この時にまで遡るとする意見がある（稲垣1968）。SB3の発見は、その可能性を高めるものといえる。つまり、この意見に立てば、国家的な祭祀を行う神社に採用された本殿形式を同じ頃に採用して、SB3は建てられていることになる。黒田氏が指摘するように、国家的祭祀制度との関連を想定できること（黒田2010）は、神社本殿発見の重要な意義といえる。

金貝遺跡を含む段丘上の開発や耕作は、建物群Aに想定される在地豪族や郡衙の出先施設の関与を得て、建物群Bに想定される有力者などが行っていたと考えられる。ただ、このような神社本殿を建てることができたのは、国家権力や国司であろう。調査地周辺に広く分布する「狛の長者」の伝承や、灌漑水路の「狛井」、駒寺集落にある「高麗寺」といった存在から想定される人物に仮託された有力者によって開発が推し進められ、神社本殿を建造した可能性が考えられている（内田2014）が、その可能性はほとんどないといえる。

以上から、開発主体としては国家権力や国司が想定される。いずれの場合も、国司が重要な役割をしていたと考えられる。

6. おわりに

蒲生野と呼ばれたであろう場所の一面に、金貝遺跡は存在する。蒲生野は、水利が悪い場所ではあるものの広大な平地が広がっていたことから、開発を行う有望な場所として存在していたと考えられる。近江での奈良時代中頃の開発状況からすると、この場所の開発は重要な課題であっただろう。

また、桓武天皇は延暦22年（803）閏10月に行宮を造らせ

て、蒲生野へと行幸を行っている（『日本紀略』）。これは、祖である天智天皇が天智天皇7年（668）5月5日に葉狹をしてから（『日本書紀』）、天皇を偲んでこの場所に行幸したとされる（栄原1983）。蒲生野が特別な場所として、認識されていたことがうかがえる。

金貝遺跡などから確認できた段丘面の開発は、国司が主導して行ったと想定された。地鎮に使用された土師器甕が、国府などが所在する湖南地域に主に分布するものであったことは、このことを示唆しているように思われる。

流造の神社本殿が建てられた背景は、答えを見つけることが困難な課題である。蒲生野という場所であったことが、その可能性のひとつではないだろうか。

註

(1) 掘立柱建物SB3(神社本殿)の年代は、報告書(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2010))では奈良時代後半から平安時代初頭(8世紀後半から9世紀前半)としているが、年代の根拠となった建物群が奈良時代後半であったことから、ここでは年代を改めている。

文献(著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

- 足利健亮(1983)「古代の景観」『八日市市史 第1巻古代』、八日市市役所
- 池田碩・植村善博(1983)「八日市周辺の地形と地質」『八日市市史 第1巻古代』、八日市市役所
- 稲垣栄三(1968)『神社と霊廟』原色日本の美術 第16巻、株式会社小学館
- 内田保之(2014)「古代の開発と神社本殿遺構—金貝遺跡の調査より—」『紀要』第27号、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 太田博太郎(1972)『日本建築史基礎資料集成Ⅱ』社殿Ⅱ、中央公論美術出版
- 大橋信弥(1998)「付論。近江の律令遺跡の諸問題—内野遺跡をめぐる試論—」『内野遺跡Ⅱ』(ほ場整備関係発掘調査報告書XXV-3)、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 金田章裕(1985)「第二章 開発と条里プラン」『条里と村落の歴史地理学研究』、大明堂
- 金田章裕(2007)「久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』(平成17年度一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財調査報告書)、砺波市教育委員会
- 黒田龍二(2010)「附論 掘立柱建物SB3の建築史的考察」『金貝遺跡』(ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書37-2)、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 栄原永遠男「奈良時代の八日市」『八日市市史 第1巻古代』、八日市市役所
- 佐藤泰弘(1996)「近江a近江国水沼村壘田地区」『日本古代荘園図』東京大学出版会
- 島田敏男(1989)「第V章3 敷地と建物」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』、奈良国立文化財研究所

- 高橋美久二(2004)「中世の東海道と東山道」『近江八幡の歴史 第一巻 街道と町なみ』、近江八幡市史編集委員会
- 辻川哲朗(2005)「近江地域出土の古代銭貨」『紀要』第18号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県安土城考古博物館(2006)『扇状地の考古学—愛知・犬上の古代文化—』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1979a)「八日市市上日吉遺跡」(ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-2)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1979b)「愛知郡愛知川町畑田廃寺」(ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-4)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1979c)「愛知郡愛知川町畑田廃寺」(ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-5)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1986)『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIII-2』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1989)『尼子南遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1990)「下之郷遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVII-2』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1997a)『内野遺跡Ⅰ』(ほ場整備関係発掘調査報告書XXIV-4)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1998)『内野遺跡Ⅱ』(ほ場整備関係発掘調査報告書XXV-3)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002a)『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002b)「敏満寺西遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書29-2』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2009a)『野村遺跡』(ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書36-3)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2009b)『野村北遺跡・小山遺跡・陣屋遺跡』(ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書36-2)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2010)『金貝遺跡』(ほ場整備関係(経営体育成基盤整備)遺跡発掘調査報告書37-2)
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2011)『金貝遺跡』(八日市新川広域河川改修工事に伴う発掘調査報告書)
- 八日市市教育委員会(1993)『川合寺遺跡発掘調査報告書』(八日市市文化財調査報告(12))
- 八日市市教育委員会(1995)『小山遺跡・東本町遺跡発掘調査報告書』(八日市市文化財調査報告(16))
- 箱崎和久(2012)「身舎外周柱列の解釈と上部構造」『四面庇建物を考える 報告編』第15回 古代官衙・集落研究会報告書、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 株式会社クパプロ
- 畑中英二(1996)「近江」『古代の土器 4 煮炊具(近畿編)』、古代の土器研究会編
- 東近江市教育委員会(2005)「土位遺跡発掘調査報告書」『八日市市文化財調査報告(24)』
- 東近江市教育委員会・東近江市埋蔵文化財センター(2011)「金貝遺跡 中沢遺跡(20・21次)発掘調査報告書」東近江市埋蔵文化財調査報告書 第18集
- 藤井一二(1986)「第2章第2節「勅旨」田の開発と官稻の運用」『初期荘園史の研究』塙書房
- 毎日新聞社(1998)『国宝・重要文化財大全』11
- 松尾充晶(2016)「古代神社の立地環境と構造」『古代祭祀と地域社会』島根県古代文化センター研究論集 第16集、島根県古代文化センター
- 南孝雄(1995)「平安京掘立柱建物の特性～庇付き建物の展開～」『研究紀要』第1号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所

挿図典拠

各図中に示した。明示していないものは中村が作成した。

(なかむら ともたか：調査課 主任)

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置づけてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願いいたします。 (S. S)

紀要 第30号

刊行年月日：平成29年（2017）3月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 / (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：三星商事印刷株式会社